

## 第4章 研究

### 1 伯耆国分寺古墳に副葬された鏡の履歴

岩本 崇

はじめに

伯耆国分寺古墳からは、鏡式の異なる3面の中国鏡が出土している。同じ古墳に副葬された鏡であっても、鏡式はもちろん製作地、製作年代を異にする例からなることは多い。本稿では、伯耆国分寺古墳から出土した3面の鏡の副葬されるまでに至る履歴を明らかにすることによって、古墳に鏡を副葬する社会的意義の一端に迫ることとしたい。

#### (1) 伯耆国分寺古墳出土鏡群の製作背景

##### ① 八鳳鏡

**製作系譜** 伯耆国分寺古墳から出土した八鳳鏡は、直径19.8cmとこの鏡式のなかではきわめて大型である(第29図-1)。糸巻形鈕座に無文の連弧文を外区にめぐらしており、岡内分類ⅢA1a型式〔岡内1996〕、秋山分類2A式にあたる〔秋山1998〕。秋山2A式には鈕に龍文や雲文をあしらう例があり(第29図-2)、廣漢西蜀銘を有する獸首鏡や環状乳神獸鏡と共通する点から(第29図-3)、廣漢系鏡群ととらえることが可能である〔鶴島1991、岡村2012〕。したがって、伯耆国分寺古墳例も廣漢系鏡群に属するとみてよいだろう。

**製作年代** 秋山2A式の年代資料としては、元興元(105)年銘鏡(第30図-1)、建寧三(170)年銘の墓碑が出土した内蒙古召湾91号墓例(第30図-2)、初平元(190)年の朱書壺が伴出した陝西省臨潼磚室墓例(第30図-3)がある。そして、秋山2A式のなかでも外区の連弧文と縁部のあいだに凹帯をめぐらす特徴をもつ例は岡村凹帯A式として分離でき、後出するものとみられるが〔岡村2012〕、これらも龍文鈕をもつ河南省南陽市防爆廠208号墓例〔南陽市文物考古研究所2012〕から廣漢系鏡群と位置づけうる。廣漢系鏡群がその紀年銘の下限となる中平四(187)年までを目安としてその製作をおおよそ終焉していたとすれば〔上野2000〕、岡村凹帯A式を2世紀後半、秋山2A式のなかでも凹帯をめぐらさない例を2世紀前半から中葉ごろの製作とみることが可能であろう。

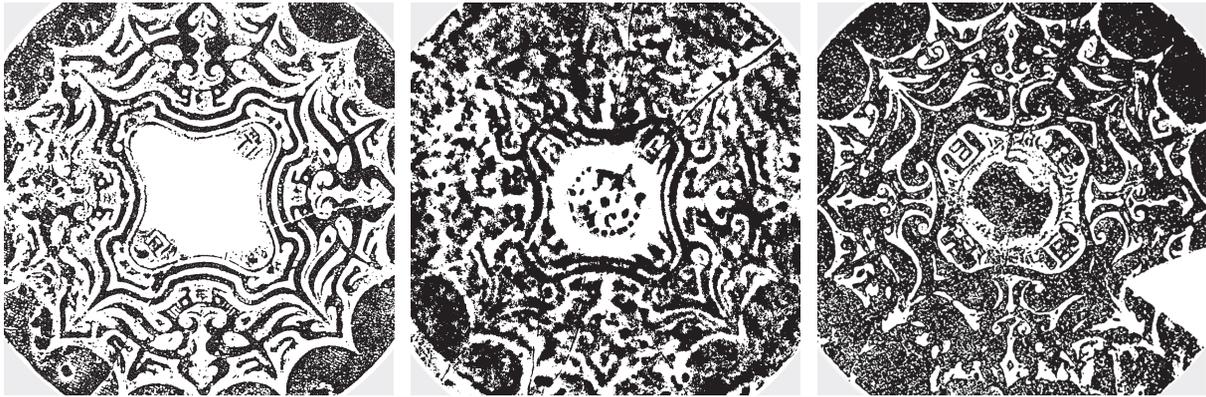


1. 鳥取・伯耆国分寺古墳

2. 石川・国分尼塚1号墳

3. 元嘉三(153)年銘 獸首鏡

第29図 伯耆国分寺古墳出土八鳳鏡とその系譜



1. 元興元(105)年銘鏡

2. 内蒙古・召湾91号墓(建寧三(170)年銘墓碑)

3. 陝西省・臨潼碑室墓(初平元(190)年朱書壺)

第30図 伯耆国分寺古墳出土八鳳鏡の年代資料

## ② 同向式二神二獸鏡

製作系譜 伯耆国分寺古墳例を含めた同向式二神二獸鏡については、華北東部系鏡群あるいは徐州系鏡群としての位置づけがなされている〔岡村1999、上野2001、馬淵2015〕。ただし、多くの同向式二神二獸鏡と異なる特徴が伯耆国分寺古墳例にはある(第31図-1)。それは外区文様とその形態にうかがわれる。すなわち、外区を16個の連弧文で構成し、かつ連弧文間に珠文を1個のみ添え、連弧文の外側に凹帯をめぐる特徴は、ほかの同向式二神二獸鏡にはないものである。この伯耆国分寺古墳例を特徴づける外区文様・形態は神獸鏡や画像鏡には例外的であるが、獸首鏡をまったく同じ要素を備える鏡式としてあげることができる(第31図-2)。

獸首鏡については上述したとおり、廣漢系鏡群を代表する鏡式の一つである〔鶴島1991、楢山2002・2017、岡村2012、馬淵2017など〕。外区文様と形態にみる共通性が有意であるとすれば、同様の特徴をもつ伯耆国分寺古墳の同向式二神二獸鏡を廣漢系鏡群とみるべき余地が生ずる。

とはいえ、先学が指摘するように〔岡村1999、上野2001、馬淵2015〕、同向式二神二獸鏡とされるほとんどの例は、伯耆国分寺古墳例とは異なって華北東部系(徐州系)鏡群として把握することが可能である。それは、華北東部系(徐州系)鏡群の画像鏡に多い樋口分類Ra〔樋口1953〕の銘文が卓越すること、そうした画像鏡から同向式二神二獸鏡への変遷過程をきわめてスムーズに追うことが可能だからである。具体例として、①求心式に主像を配置した神人龍虎画像鏡から(第31図-4)、②維綱による階段状の区画を配した同向式二神二獸鏡を経て(第31図-5)、③区画のない同向式二神二獸鏡へと変遷をとげる(第31図-6)。主像の表現も画像鏡に特有の平板な表現から(①・②)、神獸鏡に多いより立体的な浮彫表現へと変化している(③)。作鏡者銘も袁氏作など具体名を冠するものから(①・②)、一人称表記の吾作銘となる(③)。とくに①・②においては、円座鈕の外周に円圈と断面が扁平な三角形の圈帯をめぐる点、袁氏作銘を有する点、神人龍虎像の細部の描法までもがほとんど同一である点から、神人龍虎画像鏡から同向式二神二獸鏡への強い連続性をみとめることができよう。こうした様相から、同向式二神二獸鏡は華北東部系(徐州系)鏡群の画像鏡がベースとなって、まず同向式の構図を採用し、順次、神獸鏡の要素をとり入れることによって展開したものとくわしく跡づけることが可能なのである。

しかし、重要なのはそのなかであって、樋口分類Ra〔樋口1953〕の銘文をもちながらも、廣漢系鏡群の外区文様と形態的特徴をあわせもつ例として伯耆国分寺古墳鏡が存在する点であり、それゆえに廣漢系鏡群と華北東部系(徐州系)鏡群との交流を想定することが可能となるのである。

製作年代 伯耆国分寺古墳の同向式二神二獣鏡を廣漢系鏡群とすることは、同向式の神獸像配置の成立年代にかんする既往の理解に影響をおよぼす。というのは、紀年銘の存在や銘文形式から画文帯神獸鏡のなかでも廣漢系鏡群の環状乳神獸鏡がもっとも先行し、それ以外の作鏡系譜の環状乳神獸鏡や同向式神獸鏡、対置式神獸鏡は後出するとの見方がほぼ固められてきたからである〔上野 2000 など〕。その転換の年代は紀年銘から廣漢系鏡群の製作の終焉と想定できる 190 年頃にあり、それ以降に廣漢系鏡群の影響を受けた神獸鏡が各地に出現すると考えられている〔上野 2000 : 61-63〕。

これにたいし、伯耆国分寺古墳鏡が廣漢系鏡群であるとする、同向式の配置が廣漢系鏡群の製作期間の下限の目安となる 190 年頃までにはすでに存在していたこととなり、同向式の出現年代を引き上げることにつながる。この点に関連して、廣漢系鏡群と関連性の高い華西系鏡群に位置づけられる三段式神仙鏡とその関連鏡を分析した森下章司は、画文帯同向式神獸鏡の定型化に先行する 2 世紀後半段階に同向式の配置が創出される可能性を指摘する〔森下 2016〕。とくに、森下が示した陝西省鄭乾意墓から出土した同向式神獸鏡は（第 31 図-3）、銘文の特徴や外区文様の三角文から華西系鏡群とみられるが〔森下 2016 : 35-37〕、上述した②にあたる華北東部系（徐州系）鏡群で同向式配置が採用された初期とみられる事例（第 31 図-5）と共通した維綱による階段状の区画が配される点でも注目される。また、銘文 S の成立過程を検討した岡村秀典によれば、華北東部系（徐州系）鏡群とされる奈良県ホケノ山古墳出土の画文帯同向式神獸鏡の銘文は、廣漢系鏡群とみられる獸首鏡（故宮藏鏡 40）ときわめて近い関係にあるという〔岡村 2011〕。これらの指摘は、同向式の構図が共通する伯耆国分寺古墳例を廣漢系鏡群と評価し、同向式の出現を廣漢系鏡群の作鏡活動期間内に引き上げられるのではないかとする本稿の議論とも重ね合わせうるものといえよう。



1. 鳥取・伯耆国分寺古墳 同向式二神二獣鏡



2. 宮崎・六野原狐平 獸首鏡



3. 陝西省・鄭乾意墓 同向式神獸鏡



4. 袁氏作神人龍虎画像鏡



5. 袁氏作同向式二神二獣鏡



6. 吾作同向式二神二獣鏡

第 31 図 伯耆国分寺古墳出土同向式二神二獣鏡とその関連資料



1. 鳥取・伯耆国分寺古墳〔47鏡〕

2. 京都・椿井大塚山古墳〔43鏡〕

3. 大阪・安満宮山古墳〔48鏡〕

第32図 伯耆国分寺古墳出土三角縁神獸鏡とその類例

以上の点から、本稿では同向式の神獸像配置が廣漢系鏡群の製作がおおよそ終焉したと考えられる190年以前に遡る可能性を考慮し、伯耆国分寺古墳例を2世紀後半の廣漢系鏡群として位置づける。そして、同向式二神二獸鏡を2世紀後半段階における廣漢系鏡群および華西系鏡群と、華北東部系(徐州系)鏡群の交流の産物とし、後者によって主体的に製作された鏡式と理解しておきたい。

### ③ 三角縁・天・王・日・月・獸文帯三神四獸鏡

**製作年代** 三角縁神獸鏡目録の47番〔京都大学考古学研究室2000〕、同範鏡番号28〔小林1971〕に該当する鏡である。広島県潮崎山古墳〔脇坂1979〕から出土した「同範鏡」が1面存在する。三角縁神獸鏡の製作系譜については見解の一致をみていないが、筆者はいわゆる長方形鈕孔〔福永1991〕、単位文様〔田中1985、福永1996〕、銘文の特徴〔林1995・1998、福永1996〕などから、華北北部系ないし大きくは華北系鏡群と理解している。そのうえで、伯耆国分寺古墳例の製作年代を確認しておきたい。

まずは、その型式学的な位置を定めるための諸特徴をみておこう。内区主像の神獸像は表現⑤であり〔岸本1989〕、四神四獸鏡形式を代表する配置A〔小林1971〕の変形形式にあたる文様構成である。また、「天」・「王」・「日」・「月」銘を配した方格により区画した獸文帯をもつ。同様の文様構成をとる例としては、47鏡のほかには43鏡があり、48鏡、48-49鏡もきわめて近い。形態的特徴により鏡群を設定した筆者の分類では、これら4種を含めた7種をF2群とし、きわめて強いまとまりを有する資料群ととらえる〔岩本2008〕。舶載鏡として分離可能な三角縁神獸鏡を5段階に編年する案では〔岩本2018a〕、その第2段階に位置づけられる。三角縁神獸鏡において四神四獸鏡配置が定型化する段階であり、暦年代では240年代の製作と推定される〔岩本2019(予定)〕。

### (2) 副葬鏡群の組み合わせとその入手背景

前項の検討によって、伯耆国分寺古墳から出土した鏡は、2世紀前半から中葉ごろの廣漢系鏡群に属する八鳳鏡、2世紀後半の廣漢系鏡群とみられる同向式二神二獸鏡、3世紀中葉の華北系鏡群にあたる三角縁神獸鏡からなることを確認した。3面の副葬鏡群には、暦年代で少なくとも100年程度のタイムラグが存在することを指摘できる。それでは、これらの鏡が伯耆国分寺古墳が所在する東伯耆地域に到達した時期はどのように考えるべきであろうか。また、それらの入手に至る歴史的背景はいかなるものであろうか。以下では、これらの点について検討を試みたい。

**廣漢系鏡群と華西系鏡群の流入年代** 伯耆国分寺古墳から出土した鏡の入手時期を考えるにあたって

は、3面の中国鏡を個別に入手したか、一括して入手したかが論点となる。すなわち、副葬鏡群のなかでも古相を示す八鳳鏡と同向式二神二獸鏡の入手が鏡の製作年代に近接して個別になされたか、あるいは三角縁神獸鏡を含めて一括して入手されたかを峻別しうることが望ましい。

伯耆国分寺古墳の八鳳鏡と同向式二神二獸鏡はともに廣漢系鏡群に位置づけられる。そこで、この廣漢系鏡群の日本列島における出土傾向を整理することによって、その流入年代を考えてみることにしたい。ただし、先行研究の指摘や前項<sup>(1)</sup>の検討によれば、廣漢系鏡群は華西系鏡群と系統的な関係性が強く、製作地も同じくする時期がある〔森下2012・2016〕。したがって、ここでは検討対象とする鏡群をやや広くとらえることとし、廣漢系鏡群と華西系鏡群をとりあげる(第3表)。

なお、八鳳鏡については、龍文鈕などから廣漢系鏡群と判断しうる秋山1式と2A式に加え、江南系とされる秋山3A式にあたる岡村凹帯B式と秋山3B式も対象としておく。また、双頭龍文鏡については西村分類を参考とし〔西村1983〕、西村I式を八鳳鏡の岡村凹帯A式と関連するものとみて廣漢系鏡群となる可能性を考慮する。それより下る西村II式については2世紀末以降、三国期に下る例をも含む可能性<sup>(2)</sup>を考慮しつつ、ひとまず一覧表には含めておいた。

そのうえで一覧表から出土傾向をよみとると、双頭龍文鏡を除けば<sup>(3)</sup>、鏡の製作時期に近接した弥生時代後期から終末期の出土例はきわめて限定的であり、ほとんどが古墳からの出土であることを指摘できる。しかも、古墳時代前期前半までの出土例は少なく、前期中葉以降に増加する点が注目される。こうした出土傾向からは、廣漢系鏡群および華西系鏡群の多くが古墳時代以降に日本列島へ流入した可能性を考慮すべきであろう。

古墳時代における漢鏡の流入とその背景 古墳に副葬された漢鏡の評価をめぐることは、いわゆる「伝世鏡論」〔小林1955〕が議論の出発点となる。ここでは個別の検討に立ち入ることを差し控えるが、筆者は弥生時代に日本列島へ流入した漢鏡が古墳に副葬される「伝世鏡」の存在を完全には否定しない立場である。ただし、その絶対量はけっして多くはなく、むしろ少数であり、古墳出土の漢鏡は「伝世鏡」を主体とするには至らなかったと考える。その根拠のひとつが、上述した廣漢系鏡群と華西系鏡群の出土傾向にみた、古墳時代前期中葉以降における出土例の増加である。この傾向は、廣漢系鏡群と華西系鏡群に限らず、漢鏡全体に適用しうる現象と考えられる。さらに、そのいっぽうで、古墳時代前期前半に三角縁神獸鏡を中心とした三国鏡の副葬は確実に始動している点を考えあわせると、漢鏡の主体が「伝世鏡」であったならばその出土例が前期中葉以降に増加する様相とは明らかに調和しない。むしろ、古墳時代以降にも漢鏡が継続的に日本列島へ一定量もたらされた可能性が高いとみてよいだろう。

それでは古墳時代以降に漢鏡が日本列島へ流入した契機はいかなるものであったのだろうか。あらためて、廣漢系鏡群と華西系鏡群の出土傾向をみると(第3表)、古墳時代以降の出土例は列島の広域に分布し、それぞれは地域社会を代表するような首長墓に副葬されたものが目立つこと、その傾向が前期中葉以降に顕著となっていることがわかる。したがって、古墳時代以降の廣漢系鏡群と華西系鏡群の日本列島における流通には、近畿中央部を中心とした社会関係が大きく作用していた可能性が高い。このことは、規模の大きな前方後円墳に出土例が一定数確認できる点とも整合的であるといえよう。また、出土数が増大する古墳時代前期中葉まで一定量の漢鏡が日本列島へ流入した可能性をみとめるならば、その背景に魏代から西晋代にかけての継続的な対中国交渉を想定することになる。そして、その対外関係の更新・維持を主導したのは倭王権を中心とした社会であった可能性がきわめて高く、ひいては古墳時代以降に副葬された漢鏡のなかには倭王権を介して入手されたものが少なくなかったと考えられるのである。

1 伯耆国分寺古墳に副葬された鏡の履歴(岩本)

第3表 日本列島における後漢後期の廣漢系鏡群・華西系鏡群と関連鏡

八鳳鏡・四鳳鏡

番号	鏡式名	遺跡	面径 (cm)	遺跡時期	鈕座形式+外区形式	位置づけ・備考	
福岡 260	八鳳鏡	須玖岡本遺跡 (伝)	D 地点	13.6	弥生後期	隅丸方形+凹帯素文	秋山 3A 式・岡村凹帯 B 式 (江南系か)
福岡 572	八鳳鏡	平遺跡	箱式石棺	破鏡?	弥生後期	糸巻形? + 有文連弧文	秋山 3B 式? [江南系か?]
福岡 445	四鳳鏡	原田遺跡 C1 号石棺墓	箱式石棺	破砕鏡・ 11.0	弥生後期	糸巻形+凹帯素文	秋山 2A 式・岡村凹帯 A 式
岐阜 160	八鳳鏡	象鼻山 1 号墳	方方 (40)	11.7	古墳前期前半 (II 期)	糸巻形+無文連弧文	秋山 2A 式
奈良 144	八鳳鏡	桜井茶臼山古墳	方円 (約 200)	破片	古墳前期前半 (II 期)	—	詳細不明
兵庫 149	八鳳鏡	龍子三ツ塚 2 号墳	円 (17)	破鏡・11.7	古墳前期前半 (II 期)	糸巻形+無文連弧文	秋山 2A 式
岡山 86	八鳳鏡	七つ丸 1 号墳 第 1 石室	方方 (45)	破片	古墳前期前半 (II 期)	糸巻形? + 有文連弧文	秋山 3B 式? [江南系か?]
栃木 5	八鳳鏡	那須八幡塚古墳	方方 (68)	12.6	古墳前期中葉~ (III・IV 期)	糸巻形+無文連弧文	秋山 2A 式
兵庫 2	八鳳鏡	へボソ塚古墳	方円 (63)	14.7	古墳前期中葉 (III 期)	糸巻形+無文連弧文	秋山 2A 式
佐賀 93	八鳳鏡	十三塚遺跡	箱式石棺	11.0	古墳前期中葉~ (III 期~)	不明+凹帯素文	秋山 2A 式?・岡村凹帯 A 式?
佐賀 157	八鳳鏡?	古園遺跡 ST26 古墳	円 (13)	11.6	古墳前期中葉~ (III 期~)	糸巻形+凹帯素文	秋山 2A 式・岡村凹帯 A 式
石川 1	八鳳鏡	国分尼塚 1 号墳	方方 (53)	15.7	古墳前期後半 (IV 期)	糸巻形+無文連弧文	秋山 2A 式・雲文鈕
滋賀 58	八鳳鏡	安土瓢箪山古墳 中央石室	方円 (134)	15.1	古墳前期後半 (IV 期)	糸巻形+凹帯素文	秋山 2A 式・岡村凹帯 A 式
鳥取 31	八鳳鏡	伯耆国分寺古墳	方円? (60)	19.8	古墳前期後半 (IV 期)	糸巻形+無文連弧文	秋山 2A 式
京都 127	八鳳鏡	上大谷 6 号墳	方 (15)	11.3	古墳前期後葉 (V 期)?	隅丸方形+凹帯素文	秋山 3A 式・岡村凹帯 B 式 (江南系か)
長崎 3	八鳳鏡	上県大將塚古墳	箱式石棺	11.4	古墳前期後半?	隅丸方形+凹帯素文	秋山 3A 式・岡村凹帯 B 式 (江南系か)
福岡 610	八鳳鏡?	東那珂遺跡	竪穴住居	破鏡・9.4	古墳前期	—	詳細不明
福岡 673	八鳳鏡?	能満寺 3 号墳	方円 (33)	破片	古墳前期	—	詳細不明
京都 171	八鳳鏡	美濃山王塚古墳	方円 (76 ≦)	12.5	古墳中期前半~ (VII・VIII 期)	蝙蝠形+無文連弧文	秋山 1 式
大阪 262	八鳳鏡	心合寺山古墳西廊	方円 (157)	16.3	古墳中期前半 (VIII 期)	糸巻形+凹帯素文	秋山 2A 式・岡村凹帯 A 式
長野 117	八鳳鏡	神阪峠祭祀遺跡	—	破片	古墳中期	—	詳細不明
福岡 15	八鳳鏡	長須隈古墳	円 (21)	約 17	古墳中期初頭?	糸巻形+無文連弧文	秋山 2A 式
大阪 183	八鳳鏡?	峯ヶ塚古墳	方円 (96)	破片	古墳後期前半	—	詳細不明
福岡 400	八鳳鏡	稲築町漆生	円	12.1	古墳時代	蝙蝠形+無文連弧文	秋山 1 式
三重 38	四鳳鏡?	善応寺山古墳群	詳細不明	9.1	古墳時代	—	詳細不明

獸首鏡

番号	鏡式名	遺跡	面径 (cm)	遺跡時期	鈕座形式+外区形式	備考	
福岡 229	獸首鏡	酒殿遺跡 2 号石棺墓	箱式石棺	10.7	弥生後期	糸巻形 I + 無文連弧文	
奈良 393	獸首鏡	小泉大塚古墳	方円 (88)	約 16	古墳前期前半 (II 期)	不明+凹帯素文?	
広島 97	獸首鏡	大迫山 1 号墳	方円 (45)	14.5	古墳前期後半 (IV 期)	糸巻形 II + 菱雲文 II	獸文鈕
高知 2	獸首鏡	曾我山古墳	方円 (60)	破鏡・ 約 15	古墳前期後葉~ (V・VI 期)	—	詳細不明
新潟 3	獸首鏡	菅畑 (伝)	不明	不明	不明	—	詳細不明
宮崎 86	獸首鏡	六野原狐平遺跡	不明	11.9	不明	糸巻形 II + 凹帯素文	

双頭龍文鏡

番号	鏡式名	遺跡	面径 (cm)	遺跡時期	位置づけ	
福岡 419	双頭龍文鏡	岩屋遺跡	箱式石棺	9.9	弥生後期	西村 II 式 [非廣漢系か]
福岡 425	双頭龍文鏡	馬場山 41 号 a 号土壙墓	土壙墓	破片	弥生後期	西村 I 式
福岡 535	双頭龍文鏡	石ヶ坪遺跡 2 号石棺墓	箱式石棺	破鏡・ 16.6	弥生後期?	西村 I 式
石川 14	双頭龍文鏡	無量寺 B 遺跡	溝	破鏡・11.4	弥生終末期	西村 I 式
佐賀 17	双頭龍文鏡	町南遺跡	竪穴住居	破鏡・8.2	弥生終末期	西村 II 式 [非廣漢系か]
京都 251	双頭龍文鏡	黒田古墳	方円 (52)	12.3	古墳前期初頭 (I 期)	西村 I 式
千葉 91	双頭龍文鏡	中尾東谷遺跡	竪穴住居	破鏡	古墳前期	西村 II 式
福岡 164	双頭龍文鏡	鋤崎古墳	方円 (62)	11.6	古墳中期初頭 (VI 期)	西村 II 式
神奈川 30	双頭龍文鏡	戸田小柳遺跡	溝	破鏡・9.1	古墳後期	西村 II 式→III 式の過渡的様相 [非廣漢系か]
山梨 49	双頭龍文鏡?	長田口遺跡	溝	破鏡	中世	西村 II 式? [非廣漢系か?]

神獸鏡類

番号	鏡式名	遺跡	面径 (cm)	遺跡時期	位置づけ・備考	
京都 250	環状乳神獸鏡	大田南 2 号墳	方 (22)	14.6	古墳前期初頭 (I 期)	上野環乳 I A 式・村瀬画 Ab4 式・龍文鈕
鳥取 107	環状乳神獸鏡	浅井 11 号墳	方円 (44)	15.6	古墳前期中葉~ (III・IV 期)?	上野環乳 I B 式・村瀬反画 Bb1 式・「早作尚方」銘
兵庫 215	方銘四獸鏡	入佐山 3 号墳	方 (36 × 23)	12.3	古墳前期後半 (IV 期)	外区三角文 (2 渦) [華西系]
群馬 117	三段式神仙人鏡	前橋天神山古墳	方円 (126)	16.3	古墳前期後半 (IV 期)	森下 c 類 [華西系]

[凡例] 後漢鏡を対象とし、資料の実態が不明な例、出土遺跡の詳細が不明な例は含めない。ただし、八鳳鏡の秋山 3 式、双頭龍文鏡の西村 II 式は対象とする。番号は下垣 2016 の番号。出土遺跡が古墳である場合は、遺跡欄に墳丘形態と括弧内に墳丘規模(単位:m)を記す。略号は次のとおり。方円:前方後円墳、方方:前方後方墳、円:円墳、方:方墳。弥生墓については埋葬施設の種別、それ以外は出土遺物の種別を記載。遺跡時期の古墳時代の( )内は岩本 2018b の時期区分。位置づけは、八鳳鏡は秋山 1998 と岡村 2012、獸首鏡は馬淵 2017、双頭龍文鏡は西村 1983、環状乳神獸鏡は上野 2000 と村瀬 2014、方銘四獸鏡・三段式神仙人鏡は森下 2012 を参照。

## まとめ

伯耆国分寺古墳からは2世紀前半から中葉の八鳳鏡、2世紀後半の同向式二神二獣鏡、3世紀中頃の三角縁神獣鏡が出土しており、それらは製作時期の異なる長期にまたがる副葬鏡群である。また、八鳳鏡と同向式二神二獣鏡が関連する廣漢系鏡群と華西系鏡群の列島内での出土傾向を検討したところ、古墳時代に先立って製作されたこれらの鏡が弥生時代ではなく、古墳時代以降に日本列島に流入し、三角縁神獣鏡とともに一括して倭王権から入手しえたものである可能性があることを述べた。

伯耆国分寺古墳から出土した3面の中国鏡が、古墳時代において倭王権を中心とした社会関係が形成される過程においてもたらされたのであれば、その保有には倭王権との結びつきの強さといった政治的な意味合いが込められていたと想像される。とすれば、いわゆる「伝世鏡論」〔小林1955〕に再考を促すことになり、そこから波及する論点は多岐にわたると予測される。今後、さらに検討を重ね、古墳時代における鏡の保有実態とその社会的意義を解明することを課題としたい。

## 謝 辞

本稿執筆に際して、以下の方々とは諸機関よりご配慮ならびにご教示を得た。末筆ながら記して感謝申し上げたい（敬称略・五十音順）。

池淵俊一 内田真雄 小田芳弘 北林雅康 久住猛雄 阪口英毅 勢村茉莉子 高田健一 塚本浩司 中島和哉 村上由美子 森下章司 大阪府立弥生文化博物館 京都大学総合博物館 高槻市教育委員会 七尾市教育委員会 伯耆国分寺 宮崎県立西都原考古博物館 養老町教育委員会 早稲田大学考古学研究室

## 註

- (1) このほか、長方形を指向する鈕孔形態を共有する点も、両者の関係の深さを示唆する特徴として指摘しておきたい。
- (2) 西村Ⅱ式を魏鏡とする見方があるが〔上野2016〕、主文様C（西村Ⅰ式）と主文様D・E（西村Ⅱ式）には共通点が多いのになし、主文様I（西村Ⅱ式）は大きく変容しており相違点がみられる。形式的な特徴から西村Ⅱ式にはやや長い時間幅をあてうるものとし、後漢代末期から三国代に併行すると考えたい。
- (3) なお、双頭龍文鏡については、古墳時代に相当する例でも古墳以外の遺跡から出土することが多く、そのほかの鏡式とは異なるとりあつかいのなされる例が存在した可能性が想定される。そしてそのことが、弥生時代遺跡から一定量の出土が確認されていることと関連するものと考えられる。

## 引用文献

- 秋山進午 1998「夔鳳鏡について」『考古学雑誌』第84巻第1号 日本考古学会 pp.1-26
- 岩本 崇 2008「三角縁神獣鏡の生産とその展開」『考古学雑誌』第92巻第3号 日本考古学会 pp.1-51
- 岩本 崇 2018a「銅鏡・青銅製品」『前期古墳編年を再考する』六一書房 pp.19-30
- 岩本 崇 2018b「副葬品と埴輪による前期古墳広域編年」『前期古墳編年を再考する』六一書房 pp.137-148
- 岩本 崇 2019（予定）「三角縁神獣鏡生産の展開と製作背景」『銅鏡から読み解く2・3・4世紀の東アジア（仮）』アジア遊学（号数未定） 勉誠出版
- 上野祥史 2000「神獣鏡の作鏡系譜とその盛衰」『史林』第83巻第4号 史学研究会 pp.30-70
- 上野祥史 2001「画像鏡の系列と製作年代」『考古学雑誌』第86巻第2号 日本考古学会 pp.1-39
- 上野祥史 2016「戸田小柳遺跡出土鏡について」『戸田小柳遺跡』かながわ考古学財団調査報告315 公益財団法人かながわ考古学財団 pp.306-311
- 鵜島三壽 1991「龍鈕を持つ鏡—大田南2号墳出土鏡を中心に—」『京都府埋蔵文化財論集』第2集—創立十周年記念誌— 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター pp.63-72
- 王 綱懷（編）2015『中国紀年銅鏡 両漢至六朝』上海古籍出版社

1 伯耆国分寺古墳に副葬された鏡の履歴(岩本)

- 岡内三眞 1996「双鳳八爵文鏡」『東北アジアの考古學 第二 [檣域]』東北亜細亜考古学研究会 pp.285-316
- 岡村秀典 1999『三角縁神獸鏡の時代』歴史文化ライブラリー 66 吉川弘文館
- 岡村秀典 2011「後漢鏡銘の研究」『東方學報』第 86 冊 京都大学人文科学研究所 pp.1-90
- 岡村秀典 2012「後漢鏡における淮派と呉派」『東方學報』第 87 冊 京都大学人文科学研究所 pp.1-41
- 関 林 2012「西安發現唐鄭乾意墓及夫人柳氏墓」『収蔵界』7 期 寧夏雅觀収蔵文化研究所 pp.122-124
- 魏 堅 1998「第四章 召湾 90 ~ 97 号墓葬」『内蒙古中南部漢代墓葬』中国大百科全書出版社 pp.233-265
- 岸本直文 1989「三角縁神獸鏡製作の工人群」『史林』第 72 卷第 5 号 史学研究会 pp.1-43
- 京都大学考古学研究室 2000「三角縁神獸鏡目録」『大古墳展—ヤマト王権と古墳の鏡—』東京新聞社 pp.248-254
- 小林行雄 1955「古墳の發生の歴史的意義」『史林』第 38 卷第 1 号 史学研究会 pp.1-20
- 小林行雄 1971「三角縁神獸鏡の研究—型式分類編—」『京都大学文学部研究紀要』第 13 号 京都大学文学部 pp.96-170 (1976『古墳文化論考』平凡社 pp.303-377 に加筆のうえ再録)
- 下垣仁志 2016『日本列島出土鏡集成』同成社
- 田中 琢 1985「日本列島出土の銅鏡」『三角縁神獸鏡の謎』角川書店 pp.40-64
- 楢山満照 2002「四川製作の後漢元興元年銘鏡について」『美術史研究』早稲田大学美術史学会 pp.77-98
- 楢山満照 2017『蜀の美術 鏡と石造遺物にみる後漢期の四川文化』早稲田大学出版部
- 南陽市文物考古研究所 2012「南陽市防爆廠 M208 漢墓發掘簡報」『中原文物』第 3 期 河南博物院 pp.4-8,37
- 西村俊範 1983「双頭龍文鏡(位至三公鏡)の系譜」『史林』第 66 卷第 1 号 史学研究会 pp.95-115
- 林 裕己 1995「漢式鏡紀年銘鏡集成 '94」『考古学ジャーナル』No.388 ニュー・サイエンス社 pp.18-27
- 林 裕己 1998「三角縁神獸鏡の銘文—銘文一覧と若干の考察—」『古代』第 105 号 早稲田大学考古学会 pp.49-74
- 樋口隆康 1953「中國古鏡銘文の類別的研究」『東方學』第 7 輯 東方学会 pp.1-14
- 樋口隆康 1979『古鏡』新潮社
- 福永伸哉 1991「三角縁神獸鏡の系譜と性格」『考古学研究』第 38 卷第 1 号 考古学研究会 pp.35-58
- 福永伸哉 1996「舶載三角縁神獸鏡の製作年代」『待兼山論叢』第 30 号史学篇 大阪大学文学部 pp.1-22
- 馬淵一輝 2015「斜縁同向式神獸鏡の系譜」『森浩一先生に学ぶ—森浩一先生追悼論集—』同志社大学考古学シリーズ XI 同志社大学考古学研究室 pp.801-816
- 馬淵一輝 2017「獸首鏡の系譜—後漢後期における廣漢と華西を中心に—」『中国考古学』第 17 号 日本中国考古学会 pp.161-180
- 村瀬 陸 2014「環状乳神獸鏡からみた安満宮山古墳出土 1 号鏡」『「いましろ賞」入賞論文集』高槻市教育委員会 pp.18-32
- 森下章司 2012「華西系鏡群と五斗米道」『東方學報』第 87 冊 京都大学人文科学研究所 pp.43-79
- 森下章司 2016『五斗米道の成立・展開・信仰内容の考古学的研究』平成 24 ~ 27 年度科学研究費助成事業 基盤研究 (B) 研究成果報告書 大手前大学総合文化学部
- 林 泊・李 徳仁 1989「臨潼發現漢初平元年墓」『文博』第 1 期 文博編輯部 pp.37-41
- 脇坂光彦 1979「広島県芦品郡潮崎山古墳について」『古代学研究』第 90 号 古代学研究会 pp.27-30

挿図出典

第 29 図: 1. 伯耆国分寺古墳(伯耆国分寺蔵)、2. 国分尼塚 1 号墳(七尾市教育委員会蔵)、3. 元嘉三(153)年銘〔王(編) 2015: 図 19〕。

第 30 図: 1. 元興元(105)年銘〔樋口 1979: p.189-86〕、2. 召湾 91 号墓〔魏 1998: p.263 図 12〕、3. 臨潼磚室墓〔林・李 1989: p.38 図 4〕。

第 31 図: 1. 伯耆国分寺古墳(伯耆国分寺蔵)、2. 六野原狐平(宮崎県立西都原考古博物館蔵)、3. 鄭乾意墓〔関 2012: p.124 図 7〕、4. 出土地不明(大阪府立弥生文化博物館蔵)、5. 出土地不明(早稲田大学考古学研究室蔵)、6. 出土地不明(大阪府立弥生文化博物館蔵)。

第 32 図: 1. 伯耆国分寺古墳(伯耆国分寺蔵)、2. 椿井大塚山古墳(京都大学総合博物館蔵)、3. 安満宮山古墳(文化庁蔵)。  
第 3 表: 岩本作成。